故江島恵教教授を想う

インド大乗仏教、とくに中観思想の権威であられた本研究室の前主任教授江島恵教先生が、昨年５月２２日、特発性食道破裂により亡くなられた。その数ヶ月前から少し疲労がたまっておられるようにお見受けし、時折気にはかかっていたが、まさかこのような形で急逝されるとは、まったく考えてもいなかった。いま思い返しても、残念でならない。

私の時代とを合わせると、私が先生の近くにあった年月は、２０年以上に及ぶ。つまり私は、先生のご生涯の約３分の１の時間を、ほとんど同じ空気を吸い、学問に触れ、社会を見てきたことになる。

学生時代のことでは、ことに昭和３８年(1963)から４１年までの３年間は親しく交わらせていただいた。というのは、いわゆる６０年安保の影響もあって、当時、研究室に所属する学生たちの有志によって「宗教と社会」研究会が組織されていて、先生も私もかなりその活動に熱心で、しばしば激しい議論をたたかわせていたからである。３９年９月に発刊された同研究会誌の第６号の編集長を務められた先生は、「歴史感覚」と題するその巻頭言で、これを欠いたままに生・死・苦を語る伝統的仏教者に厳しい批判の矢を放っておられる。この一文からは、同研究会における議論の熱っぽさとともに、先生晩年の大蔵経データベース作成のお仕事などにも通ずる御自身の歴史感覚の鋭さの一端を窺うことができよう。

また、後年、研究室の同僚となって以後のこととしてまず想起されるのは、先生が上におられたためにどれほど学務の遂行の面で助けられ、楽をさせてもらえたかということ、そして、先生と時に激しく議論させていただいたお陰でどれほど私自身の哲学や仏教観を鍛えることができたかということである。けれども、思えばこのことは、先生にそれだけ多くのご負担をおかけし、また幾度かは簡単には消し去ることのできない苦痛を与えていたということかもしれない。先生のご生前にそうしたことを率直に申し上げ、感謝し、お詫びすることができなかったことが悔やまれる。

先生はここ数年来、憑かれたように新時代の仏教研究に不可欠の諸事業を推進してこられた。いわば、学者というよりも事業家の顔をしておられた。振り返って考えれば、それは先生が自ら選択された菩薩行であったに違いない。なぜそう受け止められるのかといえば、近年しばしば口にされたお言葉の端々から、先生が自己の生き方の問題として、急速に大乗的な宗教世界に傾斜されつつあったことを強く感ずるからである。大蔵経データベース完成のための寄付を募る際によく用いられた「勧進小僧」という言葉はつとに有名であるが、ご自分の名前の前に「愚」やこれに類する語を付されたりもしていた。就中、私が印象的であったのは、亡くなる１、２ヶ月前にいただいたお手紙の中で、ご自身を「念仏者」と明言され、自らの念仏を「酩酊念仏」と表現されていたことである。そこには、酒がほんとうにお好きであった先生の苦渋・葛藤とともに、ある特別の心の安らぎが示されているように、私には思われてならなかったのである。

ここに、先生の発案と実行力のもとに開始された本誌の第６号を先生の追悼号として刊行するに当たり、編集委員会を代表していささか追懐の想いを述べさせていただいた。いま先生は、浄土往生を遂げられ、「酩酊念仏」ではなく、まさしく「本願念仏」に安らいでおられるであろう。私どもはこのことを深く信じ、私どもに対する先生のこれまでのご恩顧の数々を省みつつ、改めて衷心より感謝の誠を捧げるものである。

平成１２年２月１日

東京大学大学院人文社会系研究科教授
インド哲学仏教学研究室主任

木 村 清 孝